

令和元年6月7日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370441

研究課題名(和文) 構文理論・用法基盤アプローチによる条件構文の使用と習得に関する研究

研究課題名(英文) Usage-based constructional approach to the use and acquisition of conditional constructions

研究代表者

藤井 聖子 (FUJII, Seiko)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：70165330

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、構文理論および用法基盤モデルに基づき、言語使用・言語習得のコーパスデータを用いた分析を通して、日本語の条件構文とその周辺に関して、その多義性・多機能性、談話における使用実態、言語発達における習得、さらに談話・語用標識(化)の諸相を複合的に分析し、理論的かつ実証的に探求した。非内容的条件文に加え、意味的隣接領域も射程に含め、さらに脱従属化(insubordination)やモダリティ構文も分析し、構文の体系化や間言語対照分析を展開した。条件構文とその周辺を俯瞰し統合する総説を Cambridge Handbook of Japanese Linguisticsに執筆し、国際的に発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

予測条件文・内容的条件文に加え非内容的条件構文等も分析し、意味においても形式においても、構文の広がりや多様性の諸相を明らかにした。様々な言語使用のコーパスを用いて、談話における相互行為や動的文法・動的語用論の視点から、構文の意味や語用論的機能を明らかにした。意味的隣接領域も射程に含めて条件構文を分析し、さらに脱従属化(insubordination)やモダリティ構文も分析することで、構文の体系化に加え、間言語対照分析に寄与しうる研究とした。

研究成果を英語で国際的議論へ発信し、国際的学術共同研究に寄与した。また、研究成果を言語教育や言語処理・AIの基礎研究としても資するため、教育にも還元してきた。

研究成果の概要(英文)：Taking a usage-based constructional approach, the present research investigates conditional constructions and their neighbors, based on analyses of spoken and written corpora. It shows the multi-faceted families of conditional constructions which bear significant variations in both form and function. Parameters dealt with include: predictive vs. non-predictive conditionals, content vs. non-content conditionals, the speaker's epistemic stance, subjectivity and inter-subjectivity, modal conditionals, insubordination of antecedent-only construction, variations in conditional markers (clause-linkers) and tense-aspect-modality. By exploring Japanese conditionals in cross-linguistic perspective, this research clarifies the rich spread of multi-faceted constructions, for those types that reflect cross-linguistic tendencies and for those that do not.

The research has been reported on, in part, in a chapter of the Cambridge Handbook of Japanese Linguistics (2018, Hasegawa ed.).

研究分野：言語学，意味論，語用論，認知言語学，構文理論，談話と文法

キーワード：条件構文 構文理論 Construction Grammar 接続構文 談話と文法 話し言葉、書き言葉 語用標識・語用標識化 談話標識・談話標識化 用法基盤アプローチ

1. 研究開始当初の背景

[1] 構文理論・用法基盤アプローチに関して

本研究は、構文理論(Construction Grammar: Fillmore 1988, 1989, Fillmore, Kay & O'Connor 1988, Goldberg 1995, Kay & Fillmore 1999, Michaelis & Lambrecht 1996, Östman & Fried 2004, etc.) 及び、同様に「構文」という概念・単位を軸にする用法基盤モデル(Usage-based Model: Langacker 2000, Kemmer & Barlow 2000)における言語観・文法観に基づく。語彙知識と構文知識との連続性を重視し、言語の規則的な部分と構文項目ごとに個別的・定型的な部分との両者に着目した。談話の中での文脈・相互行為の中で構文(意味と形式の対)の集合体としての文法を捉える。研究代表者は本課題開始までに、自ら行う日英語構文の分析に加え、総説・解説論文を執筆し、さらに、国際学会や学会シンポジウムでの招待講演(国際構文理論学会;日本認知言語学会)や、国際学会の企画・運営を行い、国際的連携での研究活動をしてきていた。その国際的研究文脈・交流の中で、本研究を進めた。構文理論・用法基盤アプローチにおける上述の点は、子供の言語獲得でも重要であることが示されていたが(Tomasello 2001; Goldberg 2006; 藤井 2010)、それら理論的發展や間言語的研究を背景に、日本語の複文構文・条件構文を対象にする研究を展開した。

[2] 接続構文—特に条件構文とその周辺—の研究は、哲学・形式意味論・認知意味論・類型論から認知科学・脳科学まで多岐にわたる分野での研究が展開してきていた。本研究代表者は、分野横断的な学際的研究において研究交流・共同研究・国際学会での共同ワークショップ(例えば、2013 “Semantics and Pragmatics of Logical Words at the 19th International Congress of Linguists. U of Geneva)を行ってきていた。本研究課題において、学際的研究との研究交流を継続し、知見を収集し踏まえつつ、条件構文とその周辺の使用と習得の研究を展開した。

2. 研究の目的

本研究は、構文理論および用法基盤モデルに基づき、言語使用・言語獲得・学習のコーパスデータを用いた分析および実験を通して、日本語の接続構文—特に条件構文とその周辺—に関して、その多義性・多機能性、談話における使用実態、言語発達における習得、さらに語用標識化・談話標識化の諸相を複合的に分析し、理論的かつ実証的に探求することを主目的とした。

この全体構想の中で軸とした本研究の具体的目的は、以下四点である：

- 目的 1. 接続構文—特に条件構文とその周辺—を分析し解明するための理論的考察を深め、日本語に加え英語その他の言語の分析や類型論からの知見を背景に深めつつ、コーパス分析を用いて、日本語の条件構文とその周辺関連構文・拡張構文(譲歩、譲歩条件、時の接続やモダリティ構文等を含む)を包括的に分析・記述すること。日本語の構文の分析・記述とともに、その分析・記述の枠組みも明確にし、条件構文の対照研究・類型論の国際的議論・知見構築に寄与する。
- 目的 2. 書き言葉コーパス・話し言葉コーパスを用いた分析および実験を通して、接続構文—特に条件構文—の多義性・多機能性・多層性を明らかにし、その意味拡張・機能拡張のメカニズムを探求すること。
- 目的 3. 目的2のための話し言葉・書き言葉コーパスの分析(特に語用標識化・談話標識化の分析)において、談話における相互行為とダイナミックな文法使用の視点から分析を展開するとともに、話し言葉・書き言葉の比較やレジスター・ジャンルにも配慮した分析を行い、共時的変容の様相を浮き彫りにする。同時に、現代語において進行中の語用標識化・談話標識化を捉えるために、焦点化した問題に関して書き言葉の通時コーパスの分析を行う。話し言葉に関する同様の目的のためには、会話データ 2015-16 拡張版(Fujii 1995-96, Fujii 2005-06)に続く定点会話収集の3回目)の収集・構築を行う
- 目的 4. 条件構文(条件構文を基盤とする語用標識・談話標識を含む)の習得に関する理論的・実証的研究を、子供の第一言語獲得において展開する。

3. 研究の方法

構文理論および用法基盤モデルに基づき、言語使用・言語獲得・学習のコーパスデータを用いた分析および談話産出実験を行う。海外当該研究拠点において当該分野で先駆的研究を展開してきている研究者との理論・類型に関する共同研究や研究交流を進める。これらの共同研究・研究交流を継続しつつ、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』(国立国語研究所)、『日本語話し言葉コーパス(CSJ)』、『Conversations in Japanese (Fujii 1995-96) (Fujii 2005-06)』を主に用いて、上記目的1、2、3の研究を進めた。

とりわけ目的3に関して、『Conversations in Japanese (Fujii 1995-96) (Fujii 2005-06)』をデータとし、テレビ番組・ニュースの録画データやアカデミック談話・ディスカッション等の

談話も適宜分析に組み込んで、談話における相互行為の視点からダイナミックな文法使用を分析した。

Fujii 1995-96, Fujii 2005-06 に続く定点会話収集の3回目 2015-16 期の収集と構を行った。

目的4は、目的1・2・3の分析に基づいて行った。特に(C)条件前件節のみ、(D)条件構文基盤のモダリティ複合辞構文、(E)条件構文基盤の談話標識は、目的4の言語発達において(発達段階とプロセスの解明に寄与しうる)重要な構文として着目して分析した。

4. 研究成果

本研究では、構文理論および用法基盤モデルに基づき、言語使用・言語習得のコーパスデータを用いた分析を通して、日本語の条件構文とその周辺に関して、その多義性・多機能性、談話における使用実態、言語発達における習得、さらに談話・語用標識(化)の諸相を複合的に分析し、理論的かつ実証的に探求した。

本課題期間中に、the Cambridge Handbook of Japanese Linguistics (Cambridge University Press, Y. Hasegawa (ed.)) の文法構文の章として、条件構文に関する総説 Chapter 24 Conditionals を執筆し刊行した (Fujii 2018)。条件構文に関するこの総説において、条件構文とその周辺の研究に関して俯瞰し統合した。また、言語学および日本語学研究一般において本課題研究の位置づけや関連づけを行った。さらに、the Cambridge Handbook of Japanese Linguistics の分担執筆・自他論文の査読等共同プロセスを通して、国際的議論の場に、本研究を提示し評価・フィードバックを得ることができた。

平行して、話し言葉・書き言葉コーパスや会話データ (Fujii 1995-96, Fujii 2005-06, 2015-16) を用いた分析において、文脈やレジスター・ジャンルにも配慮した共時的変容の分析や、談話・相互行為における条件構文の語用・談話機能の分析を進めた。これらの研究成果の一部を、認知言語学会(ICLC)や国際語用論学会(IPrA)や概念構造・談話・言語学会(Conceptual Structure, Discourse and Language (CSDL))等において発表した。

さらに、子供の第一言語獲得における条件構文の習得に関する理論的・実証的研究を進め、第10回国際構文理論学会(2018年、パリ)において研究発表を行った。複文に加え、条件構文を基盤とするモダリティ構文や前件節のみが文法化している構文の習得を分析し、用法依拠・構文依拠の習得過程を新たな仮説に基づき明らかにした。また、国際的議論の場に本課題の言語獲得研究も提示し評価・フィードバックを得ることができた。

本研究において、以下を含む複合的分析を進めてきた。

- (A) 接続条件構文(内容的条件): 意味と形式の結びつきを構文群として分析・記述する。そのための条件構文の類型に関して、理論・先行論文からの知見を広く深く把握し(目的1)、類型論上の議論を組み込みつつ分析を行う。コーパス分析に基づき、構文と語彙との結びつきを明確にする分析も行った。
- (B) 接続条件構文(非内容的条件): (A)同様に、意味と形式の結びつきを構文群として分析・記述するとともに、語彙と構文との結びつきを明確にする分析を行う。条件文に関する既存の理論や類型論で把握することのできない機能や特徴を浮き彫りにし、非内容的条件構文の新たな類型論を考案・提示した。
- (C) 条件前件節のみの使用と文文化・構文化: Insubordination 理論(Evans2010 等)を踏まえてコーパスに基づく分析を行い、Insubordination 論に関する類型論国際議論に、日本語研究から逆発信した。
- (D) 条件構文基盤のモダリティ複合辞構文: モダリティ等を出示する複合辞が形成する構文に関して、参与する語彙とともに分析・記述する。<代表的事例> [~接続形態素 [評価性述語(評価的表現)] 例「~たら[評価性述語]」、「~ない[否定的評価性述語]」、「~でも[肯定的評価性述語]」、「~でも[否定的評価性述語]。]
- (E) 談話における談話標識(化)・語用標識(化)の諸相をコーパスを用いて分析した。

成果・意義としては以下の点である。

- [1] 構文理論に基づき、条件構文を、形式と意味・機能とが結び付く複合体・構文として分析し、狭義の仮定条件・予測条件文に留まらず、非内容的条件構文等も(内容的条件構文との比較も含め)分析し、意味の観点においても形式の観点においても、構文の広がりと同様性の諸相を明らかにした。
- [2] 談話における相互行為と動的な文法使用の視点から条件構文の使用を分析することにより、条件構文の構文化した意味や語用論的意味機能を(相互峻別と共に)明らかにした。さらに、条件構文の多機能性や構文拡張や構文化の動機に関して、談話における相互行為やコンテキストや話者意図等も射程に入れて考察した。
- [3] 条件構文に関する間言語的学術研究への寄与: 意味的隣接領域も射程に含めて条件構文を分析し、また、形式的にも条件節のみの構文化やモダリティ構文を含む分析した。これにより、構文の体系化を可能にしたことに加え、間言語対照分析に寄与しうる分析が提示できた。

- [4] この数年で国立国語研究所を中心に構築されてきた日本語書き言葉の大規模均衡コーパスや通時コーパスや話し言葉コーパスを用いて、条件構文を新たに体系的に分析した。その分析を通して、条件構文の意味・形式の記述に加え、コーパス自体における短単位・長単位に関しても、条件構文が関与する短単位・長単位に関して考察することができた。
- [5] 構文・用法依拠アプローチで条件構文の習得を分析し、言語獲得研究における複文の習得の研究に資すことができた。
- [6] 国際的学究への寄与： [1]-[5]全般に、国際的学術的背景での理論や先行研究を十分に踏まえ、それら国際的学術背景との連携と保ち鑑みつつ展開し、かつその日本語研究(および日英対照分析)の成果を、国際的知見(理論,分析)を踏まえた日本語の条件構文の実証的研究成果を、国際学術言語である英語で(日本語を必ずしも理解しない研究者にも分かるように) 国際的議論へ発信し、国際的学術共同研究に資すことができた。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

Fujii, Seiko. 2014. A corpus-based analysis of adverbial uses of the quotative TO construction: Speech and thought representation without speech or thought predicates. *Japanese/Korean Linguistics*. Volume 22, 293-305. Giriko, Mikio, Naonori Nagaya, Akiko Takemura, & Timothy J. Vance (eds.) Stanford: CSLI Publications. [単著, 査読あり]

Fujii, Seiko. 2018. A constructional bootstrapping account of the early acquisition of Japanese conditionals. 178-179. ICCG (International Conference on Construction Grammar) Proceedings.

藤井聖子 2017. 「学部生へのライティング支援と大学院研究教育とを繋ぐ卓越大学院試行プロジェクト—書き手・チューター双方への学術的ライティング力養成支援に向けて—」『言語・情報・テキスト』Vol. 24, 93-104.

藤井聖子 2016. 「ジャンルと文法 — 引用構文の新奇用法 —」日本言語科学学会論文集, 114-117.

加藤麟太郎・藤井聖子 2017. 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いた「ていく」「てくる」構文の意味分析」言語資源活用ワークショップ発表論文集 Proceedings of Language Resources Workshop, 273 - 281. 国立国語研究所

Fujinaga, Kiyono, & Fujii, Seiko. 2017. Negotiating Pragmatics of Student's Writing through Tutorials: A Case Study for Exploring World Japaneses. *Language for Specific Purposes: Insights and Innovations*, (9) 4-2, 75-80. [共著, 査読あり]

内田諭・藤井聖子 2014. 「クラスター分析とフレーム分析による語彙のジャンル別特徴—「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用いて—」『言語文化論究』Vol. 34, 21-34. [共著, 査読有り]

〔学会発表〕(計 18 件)

Fujii, Seiko. 2018. A constructional bootstrapping account of the early acquisition of Japanese conditionals. International Conference on Construction Grammar (ICCG). (2018.7) Paris.

Fujii, Seiko. 2017. An innovative use of the quotative TO construction in Japanese: Context-driven constructional variation. Panel Multiplicity in Grammar: Modes, Genres and Speaker's Knowledge. The 15th International Pragmatics Conference. (2017.7.) Belfast.

Fujii, Seiko. 2015. Pragmatics and Intersubjectivity of Conditional Constructions. The 14th International Pragmatics Conference. International Pragmatics Association.

Fujii, Seiko. 2015. What forms and functions get to the left peripheries in Japanese conditional constructions? A paper presented at the 13th International Cognitive Linguistics Conference. Newcastle, United Kingdom.

Fujii, Seiko. 2014. Conditional constructions as utterance-initial discourse markers in Japanese. A paper presented at the 12th international conference Conceptual Structures, Discourse, and Language CSDL. Santa Barbara. [単著, 査読あり]

藤井聖子 2016. 「ジャンルと文法 — 引用構文の新奇用法—」日本言語科学学会 (JLSL). 2016.06.

Fujii, Seiko. 2014. From reduced, integrated to complex constructions in acquiring conditionals in Japanese. A paper presented at GURT Georgetown University Round Table on Language and Linguistics. 2014.

Oana David, Eve Sweetser, Myriam Bouveret, Seiko Fujii & Paula Radetzky . 2014. You can break the rules but you can't crack them: On metaphor and argument structure constructions with CUT/BREAK verbs *Proceedings of the eight International Conference on Construction Grammar*.

Sweetser, Eve, Oana David, Seiko Fujii, & Paula Radetzky. 2014. Metaphor and grammar: the case of CUT/BREAK verbs in verb-particle constructions. A paper presented at the 12th international conference Conceptual Structures, Discourse, and Language CSDL. Santa Barbara. 査読あり

Oana David, Eve Sweetser, Myriam Bouveret, Seiko Fujii & Paula Radetzky. 2014. You can break the rules but you can't crack them: On metaphor and argument structure constructions with CUT/BREAK verbs A paper presented at the eight International Conference on Construction Grammar.

葛岡裕美・藤井聖子(発表者)・藤井美咲 2018.「ライティングチュートリアルにおける沈黙の談話分析」社会言語科学会第41回大会. 2018.3.

藤井 聖子・葛岡 裕美・藤井 美咲 2017.「学部生へのライティング支援充実の試みと連携する卓越大学院構想プロジェクト —チューター・ライター双方への学術的ライティング力養成に向けて—」 The Ninth Symposium on Writing Centers in Asia. 2017.3

藤井 美咲・藤井 聖子・葛岡 裕美 2017.「卒業論文執筆支援のために行った継続的ライティング・チュートリアルの縦断的事例分析」 The Ninth Symposium on Writing Centers in Asia. 2017.3

葛岡 裕美・藤井 聖子・藤井 美咲 2017.「ライティングチュートリアルにおける沈黙の意義 —卒業論文執筆事例の談話分析—」 The Ninth Symposium on Writing Centers in Asia. 2017.3

藤井聖子, 藤永清乃, 金沢じゅん 2015.「授業活動との連携で行うライティング・チュートリアルの役割・意義—第二言語としての日本語の場合」 The Eighth Symposium on Writing Centers in Asia.

金沢じゅん, 藤井聖子, 藤永清乃 2015.「日本語学習者とのライティング・チュートリアルにおける対話の分析—自立的ライティングを促すために—」 The Eighth Symposium on Writing Centers in Asia.

Fujinaga, Kiyono. & Fujii, Seiko 2016. Negotiating Pragmatics of Student's Writing through Tutorials: A case Study for Exploring World Japaneses. The 10th International Language for Specific Purposes Seminar. Universiti Teknologi Malaysia, Kuala Lumpur. July. 2016.

2015. Beyond pro-forma agreement: Three types of pre-disagreement agreement. A paper presented at the 14th International Pragmatics Conference. Antwerp, Belgium. (co-authored with Noël Houck & Donna Tatsuki)

〔図書〕(計 2 件)

Fujii, Seiko. 2018. Conditionals, Y. Hasegawa (ed.), *Cambridge Handbook of Japanese Linguistics*, 557-584. Cambridge University Press. [単著, 査読あり]

Hasegawa, Y. (ed.), *Cambridge Handbook of Japanese Linguistics*. 775 pages. Cambridge University Press.

藤井聖子. 2019.「場面と意味概念化における文脈化・その複層性」澤田治美・仁田義雄・山梨正明編『場面と 主体性・主観性』89-106.ひつじ書房.

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。